



^13  
4436  
5



13  
4436  
5

多賀家  
雪鏡  
卷之五

繪本雪鏡卷之五

目録

- 多賀家の庶子袴着の詰たがけり  
義則よしのりと側室わきむすめ成なりをを一ひとつつ圖ずみ
- 定さだの方かた大おほ月つき小こ春はるとと流ながるる詰づみ  
定さだ北きた有あ私ひめめのの圖ずみ
- 玉たま女め玉たま定さだの方かた乃の玉たま杖づえとと伊い人ひと詰づみ
- 玉たま簪かんざしとと拾ひろ小こ圖ずみ
- 玉たま簪かんざしとと遠とほくく謙けん倉くらとと赴まりり詰づみ

繪本雪鏡卷之五

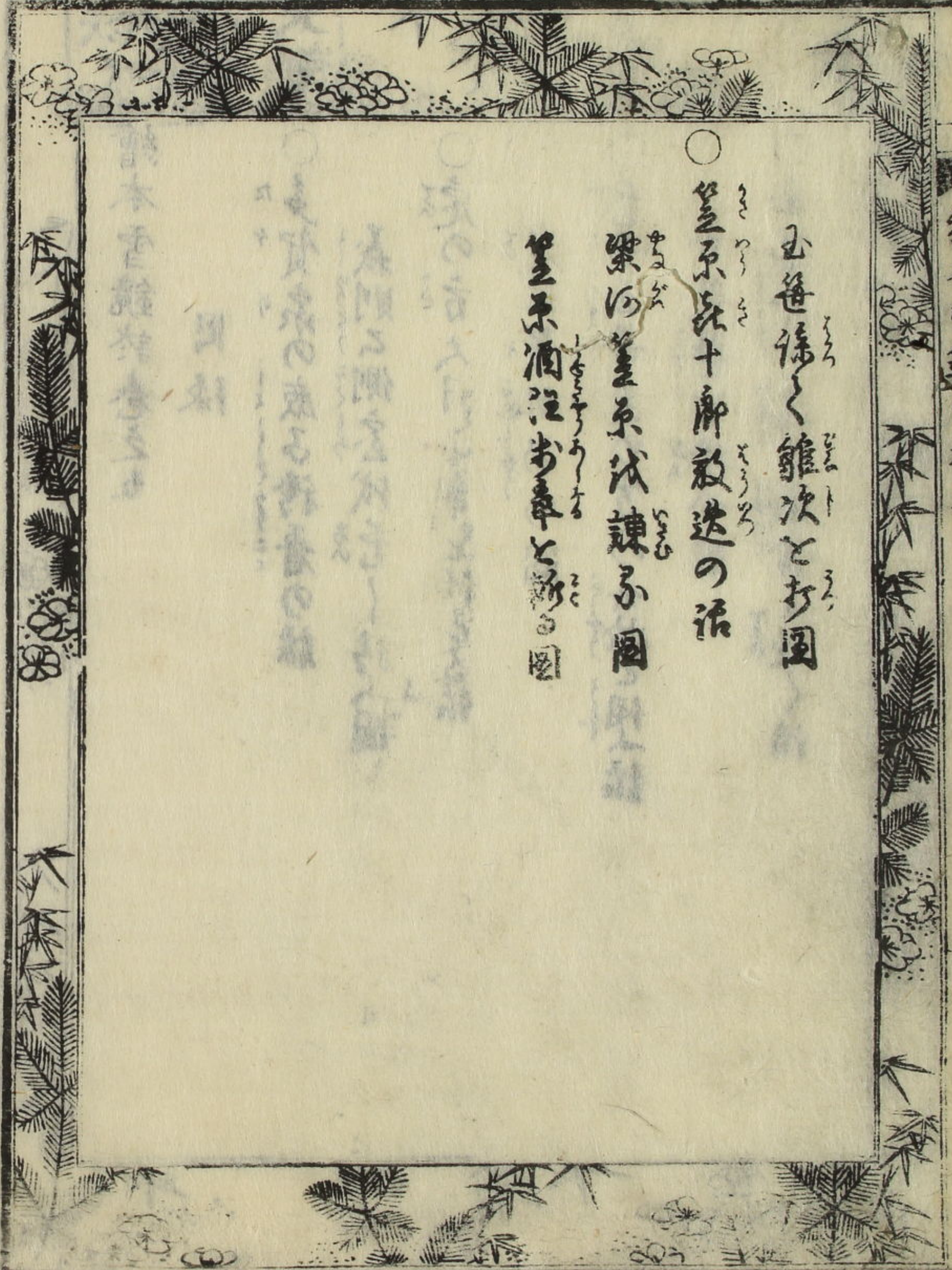


繪巻言時談卷之五

多賀家の庶子袴着の法

却後多賀大領我則云仁智の明君にして内諫と納介氏と接洽  
 私の及誅しうごも色も満の癖ありくまは資色絶し良  
 家の系女と求めく教多侍嬢は侍あり其中にもお菊お定とある  
 女別と寵とるる處又と奉の喜あかしくも男の生産せしるは  
 義則云の侍候大方さうは女とをも、例定とし奉の方定の方  
 と稱せしちひ多の侍女と附く國縁余の両石もをまねん及女  
 女日月の任娘として定の方の二月二日奉の方の二月七日の生産  
 ありと人とも定の方の國はましく其若未縁余小判する内菊の  
 方生産の奉と足利家若のひり上まは奉の方お生ありし

繪巻言時談卷之五



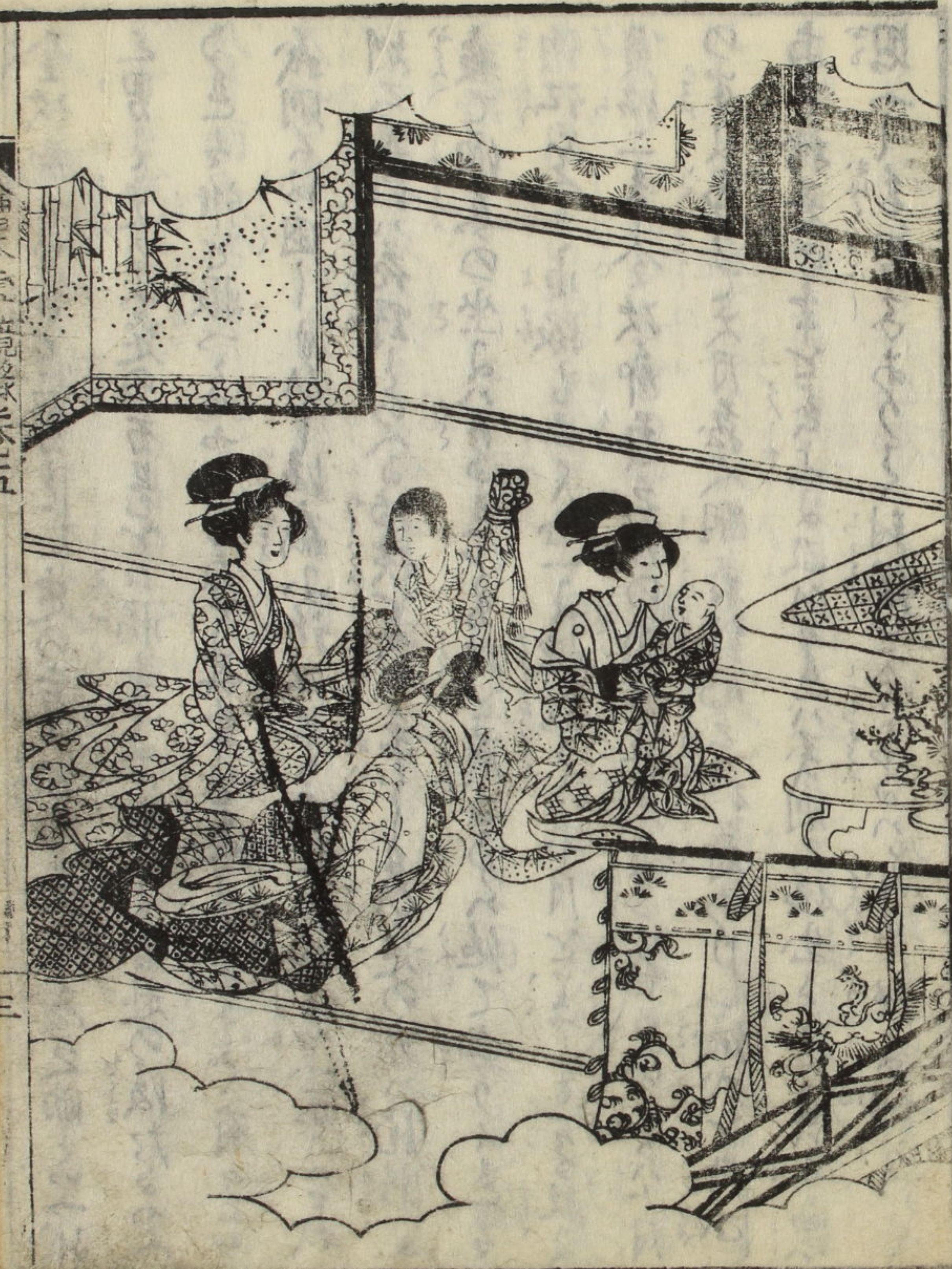
玉色係く能次と打圓

○ 望京流十所放送の法

望京流望京流諫ふ國

望京酒望京酒と祈の國

人由巳下三立見及上六五



三



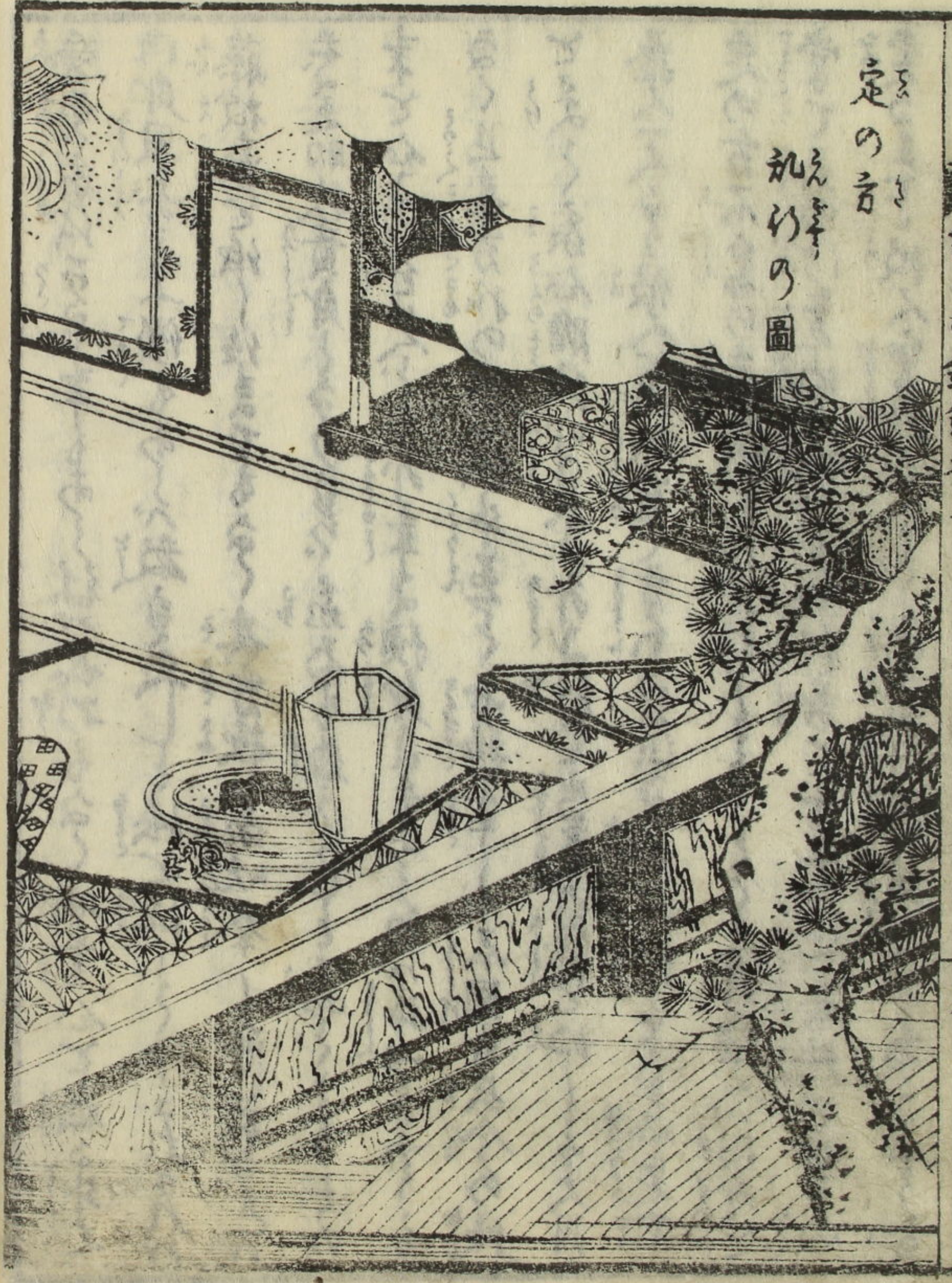
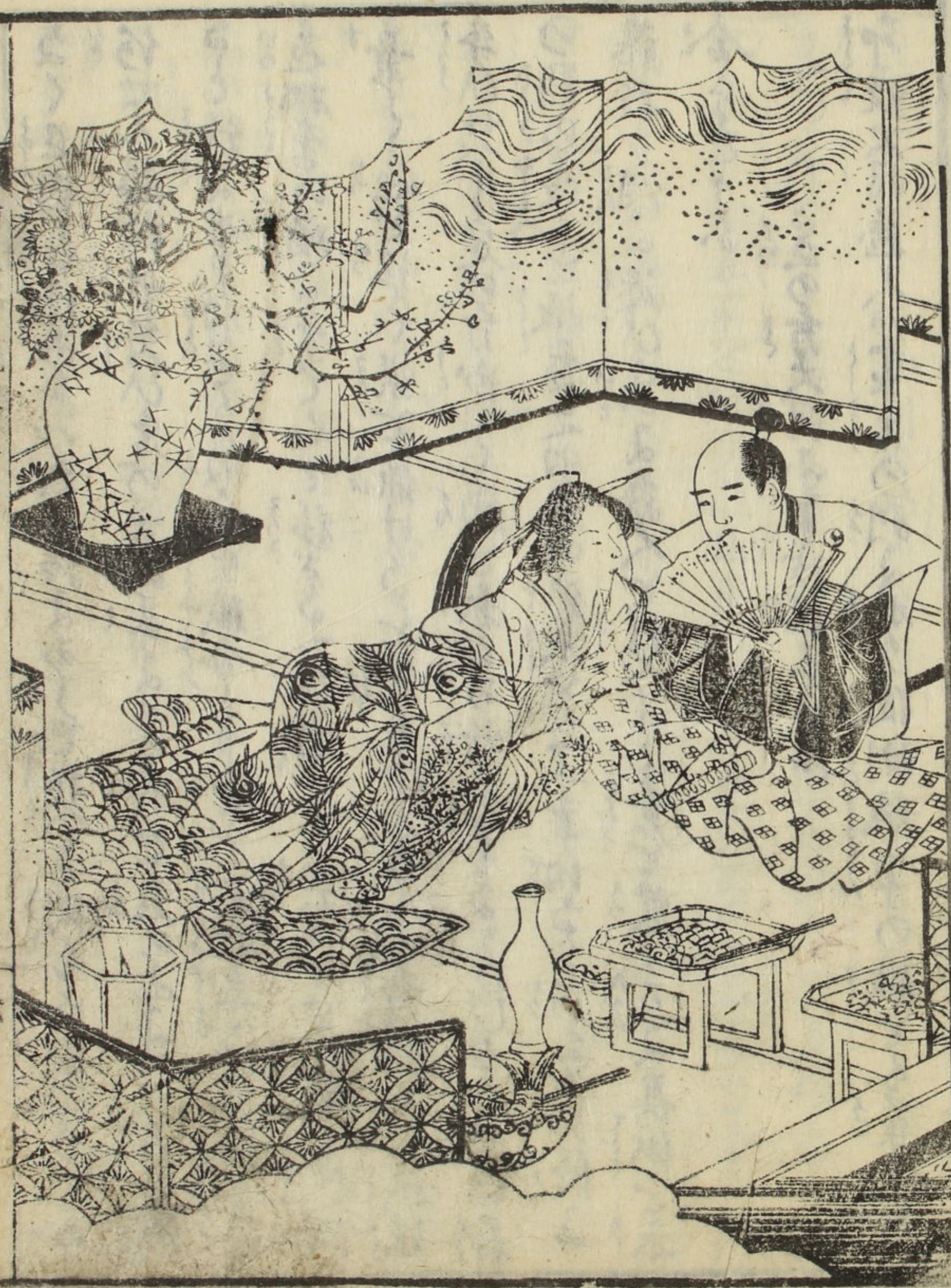
義則云  
側室  
と  
後  
と  
圖

終之室鏡老五

全次高の人の二男とし定の方が後らなる慶之助といふ  
と男と定より定の方を口稱事よハ思ふと若赴の後たるゆ  
ゝと誰と根づきやもなしく其事と定よも出さく有るが  
我則て凶困しむし後病小治江とも反し入んとるよ一  
別て其以の花野とる居候とちるをいひ定の方へ飛脚  
妻て酒宴の坐よハるまども枕と薦るゆハ絶てそりな  
治江とて由縁もるく公一は嫌致く奉月とてま一なる殿  
貞治二年全次郎其之助の両方五歳よるせむい一六  
の中よありて大月燕人嗣君時時云渡り着ありし儀式と考ふ  
お方袴着の事と云よ及ひなま則て伝出さるよハ事  
思ふ多男子ありく封録と分るハ外見能よ似

長門守の副と反し其除参之助と始して以後男子幾人出生  
はとも皆小孫と云く家長と云よ及しと兼く公安しぬ  
おわくハ知少無智の時より預め其姓の命と定をま  
長の後参の端と罪あり同く今夜の袴着全次郎ハ孫  
居館もく長門守が式礼のどく取ひひき之助ハ礼の事と  
て穂波小取斗と云く各終流と云くは燕人伝と清く全  
式礼の事と謙念の緒日ハ通下又河田又終くハ長月  
参之助及袴着の礼と執りひ儀式早て城介の女  
うども我則て氣くハ伝あまハ夜取の取ハ装の  
大日藤略小ハ園君の殿子小似るべくもあ





定の方

礼の圖

新古今録卷五

五

るく且内介信あまの侍よあつて扱ふ樹も口しけるも  
 せせん藤枝おあひ定の方の身よにまかせたのよつたれも例  
 るくはつても尸習せり彼人重職分と尸せど未仕奉まは海軍の  
 色桃李の婿よまて心と移る幸の有はじ美沙子のあは探城  
 毒く色と紅く渠と兼けりすと申すはふるく其故のよは成能  
 申ひはゞ一定の方少く顔と赤らち皆言もふりしごんの内君  
 の羅の表しと恨き之即處のゆ未とそふ幸切なるおるよは終よ  
 藤枝の河よ従ひ喜よ落人とれぐいとまを交へ互よ其術と示  
 合よとさふ

定の方大月小幸成法とる法

即況大月落人の家居の列よかり摘側執事の職とも兼てら

内介と普なまは義則の時となくちく幸と若強しあひ又も酒  
 宴の席へちく幸もありて初と進の退出休又よ及ぬまは館  
 申よ一の体息石と初り退出進刻の時其あは宿ととらふと許  
 とまをれば藤枝の定の方と義と術と示し合せ落人が館と寄  
 せし候と伺ひ義則この石の中体て内よ振としる落人か今まで  
 若の侍若よまはし、後ひちるは幸中うんと取ともる故は美不  
 あると藤枝出達て己が致屋よ清と只今の石故のあはひは若其  
 方枝の表よ及まで所用整とれ徳も有うと兼せしとる氣体の  
 高酒と初よとの侍るう心と致し是よて後くれ体ひひしと表  
 て後し酒候と取出し心利たる侍女よ酌とあつて初と進大月  
 面とわしけ扱へる幸あつて中の中不事あはしは是女候故



せり哉圓一也と云ふなり並べけ式の初仕既若方とらぬ事と  
 仁意は背くも畏多る事へ後又短せて一献頂戴仕へしと取又取  
 献と香けたり藤枝時分とより定の方と指さすも盃と包  
 らし藤枝及び竹女等つらとなく次の方よりさき今の大月定の  
 方をよりりし時定の方後面迄と會て大月が膝え小とさき  
 今宵其方枝と指し其の傍よりあはれ自ら頼りてさきあり  
 て形は半ひよりい事准有つて同なる者よりさきさき心成  
 致しく衆とゆさせ又と身と大月は傍せ百の端とさきしと  
 さきされば大月少し心警ては身衆よりさきさき事ありは  
 ださし衆中よりひけしと側小なるさきへ疎取て嫌とさきもさき  
 事ありはさきとわんと取又短と退人とさき油と引止面

有るれよりさきさき事ありは後さきは半ひよりさきさき  
 分致と思ふ餘死ぬる時と心と定りて取り一ちゆさきさき分  
 てさきとも推し又大月肩と取れは後よりさきと思ふ  
 餘りしとの洞若の供恩とさきと衆との取事さきの方  
 大月が膝よりさきさき事とさきとさきさきとさきと取  
 又今へ少も惜りさきとさき切なる取れさき大月替くさき  
 てさきさきし身衆の側室とさきさき清水時分よりさきさき  
 衆と取れさきさきさき衆あるさきさきさきさきさきさき  
 此及の取れさきさき事と衆人おさきさき事取てさきさきと  
 せさきさきさきさきの方大月替くさきさきさきさきさき  
 能も衆心とさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき







玉巻 藤子 離次 歩み

玉巻 藤子 離次 歩み

世上人歎の險はましく白し衆人うけはむく平生と誤る性有超  
 の胡二一時的豪傑ゆゝも其洲と免きと況や固忠行義騰云  
 その初はむく真道と失ひ其守とこそなる事あらんやこれハ  
 大月原を竊は虎狼の心と懐く而も定の方よき之助成の身  
 ととゆく損をけ君とましく己は一人権勢と執らん心は又は一度  
 其と定の方の妖魅はまひは是より後好深あま互に又密法にて  
 本成添ると人どもを女藤枝が斗らふ不道は定の方にゆ女三  
 人のかいりあはく知るものなく其年も書て欠法と奉の及ふも  
 本一と定の方竊ふ衆人と括して母を月日過易く今奉も  
 早才と大度許出射あまはまも從ひて徳念へ赴きよりゆるも好ど  
 通し彼令被地は移すよりとも頼あはせし一と必お捨ゆよ

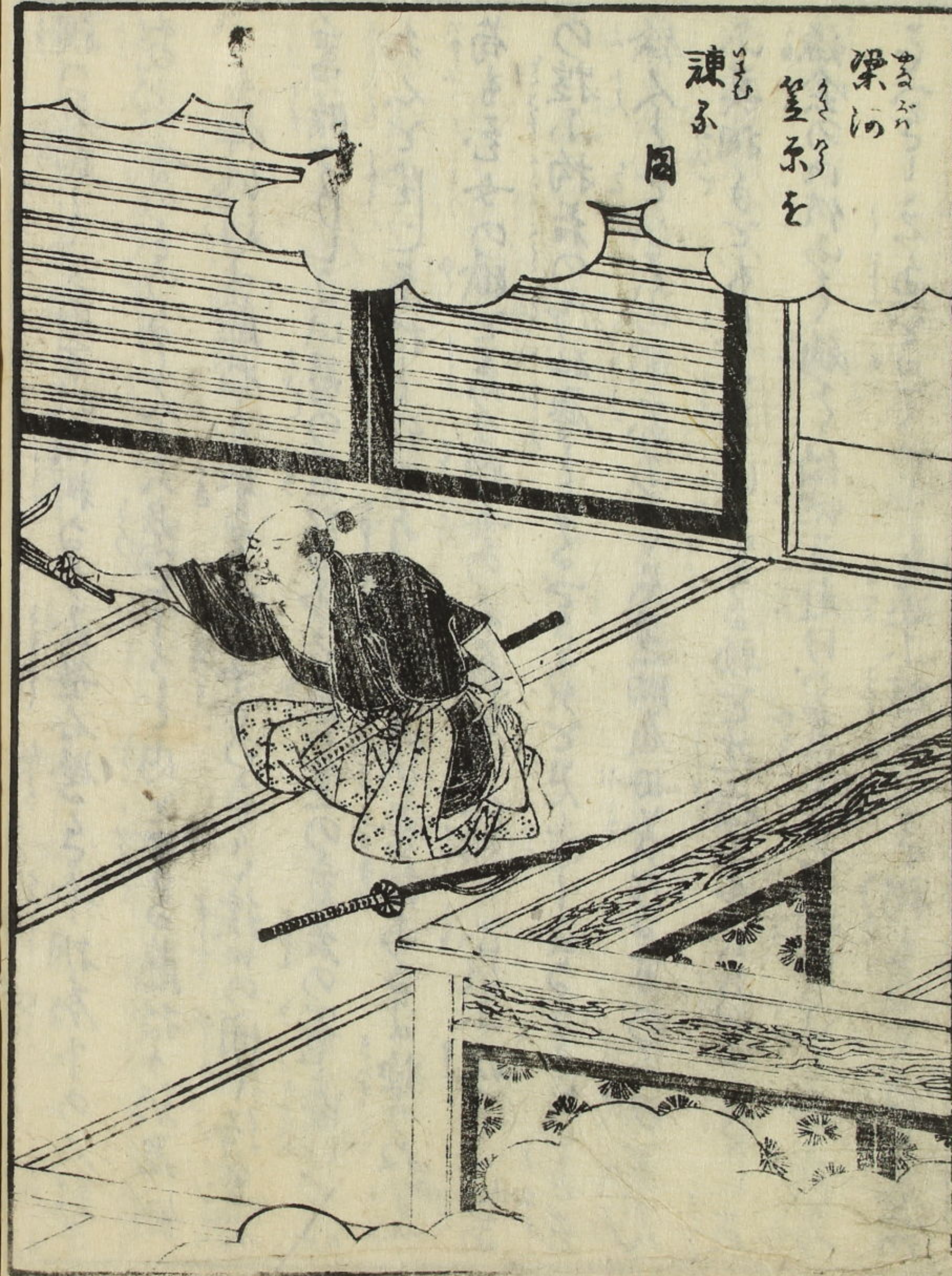
と衆人か曰はるるも中も中も今云の法思ふく重  
 初ふともども出射始が奴と懐くあはくは嗣君経射のせと  
 ろうあはゆる港間と遇て結と失ひ身と恥あらん人もあはく  
 以長身身の役らましく之助成とましく君とせは其忠文は  
 え本まをを二ある且六秘幕暗ふるよまはは然まども衆人  
 一塔思石をましく事と愛しむはぬ法を衆人よは汗滴ふは  
 雅一衆縁念は赴くは彼地のを女中志の中にて人と撰竊よ  
 誅斗と扱て嗣君の過失とす出し其と以君の心と翻るは  
 本其地口人必もましく事とあはは定の方大は女諸しるは衆  
 と決し衆人が殺すも秘をましく其夜に引めて後夜に懸曉る  
 結の喜よ衆人こそぬ名珠と情をつく後枝が初巻をましく部下と

つゝひと歩の後の方よ燭の光指て是も何れも廊下は是も人  
 着ありあ人の大よ心奪るとぞ早くも錠の間の道出定の方よ  
 藤枝が於屋小入人ととるは具間も有るは局廊下と死りり  
 傳よ居間へもよきるはよ女藤枝が何れ玉色くつよその具衆へ  
 造りありて河次小富しるが外よ通へて事と思念たりしは毎  
 より早く靴出錠口の方よ来る小藤枝が於屋よ密なる物まけ  
 走べざるは方より何れ見るは味爽あそく錠よ入るはと正し  
 く人ありて迎候まし取候るはは大よ懐を走りし刃見るは早くも  
 去て一の替速散たり後の沈と腹よ納て錠口よあるは早くも開  
 くとく人の出入せし作るは蓋怪むとくも知らぬよしとくると  
 毎ト廻く着枝と高勢しく於屋よゆり被蓋とさかしく熱

視へ見驗し定の方れ指料あり玉華を奪ると今期廊下の人教を  
 ぬき密舎のものあるらんよ京せしと内と寄る藤枝が於屋側  
 とも婢は討つ藤枝と来るうてよそのあるは錠口の用し侍方不  
 言暗ざりしよは替のまなる少く思ひ定の方君の電度しと帳  
 介人と生じ着枝と孫て介人と引入錠の季初あるは極りねと  
 苟もを女の職と着る婢女の石蔵と又割、正は小次く河次  
 の控小拘君の御恥辱とするはと見遣しとるうと正し  
 餘人ときひ玉の側室ふくきと助成母養なる方の玉帳とふん  
 小真相もとも見定ちばまする物と沈按小幸の意くとし  
 鎌倉の山伏あそく廻く彼地へ赴けば着るると林の邊もあはれ  
 とくといふととて世にも遠小探案つと秘もよく教目心成



梁河  
 筆系を  
 諫ふ  
 因



若し其の如くはと受け竊小其後定とて何ひる

玉簪中と送て縁余小赴く信

此は女の中は離次とてそのあり心性也とて目くの新小志  
幸よく而も才多入よ詔く終事とあせしむ義則このまふけひ  
まの張とるくすと執しゆ久八雨とて其他のゆかり信とてまも  
少も真言と辞せむむむの傍事とて誰有く染成魚む  
ものよりくるあるふ本夕方其母の方より書と紙たりとて  
替く傍事と頼重初居しとて是書とて居りしとて遠くは有て  
盆植よ水と灌よとの信よ書と問も痛小あとたれ多の道徳り  
灌よしるるも替く時と移しぬ小其事と知平使の者り信  
そるるんと心氣と居るよあんとして次の間のおに信て

玉簪が入来る小果と信高様よ持たるぬ意玉簪が胸小高しふ  
大は珍信人ととる時早くも玉簪をとりて女の信も女は  
遠く奔思り人よ信あて信るる一とこの合秋も去るは僕よ  
若る不法ものよと玉簪離次と取て引込め居とてかく敷くは替  
よとばと合信女信大よ信るる玉簪がもよ禁て先信と信離小  
只信信と信るる玉簪信日して信と信し居く禁ては別信ぬ  
離次はた小信し玉簪が信想と引出せしもの心よと信り信さふ不  
来とハ信るる信の信の信よてお掛せし信一は信と合其来ハ  
心懸しとて信信は信甲信替しとて信信も中うて信るるよ  
夏の夜乃信るる信の漏も信内外も信信静し信信信の信  
と信くし信信信のあり信信し信信信りしと信るる信遠く

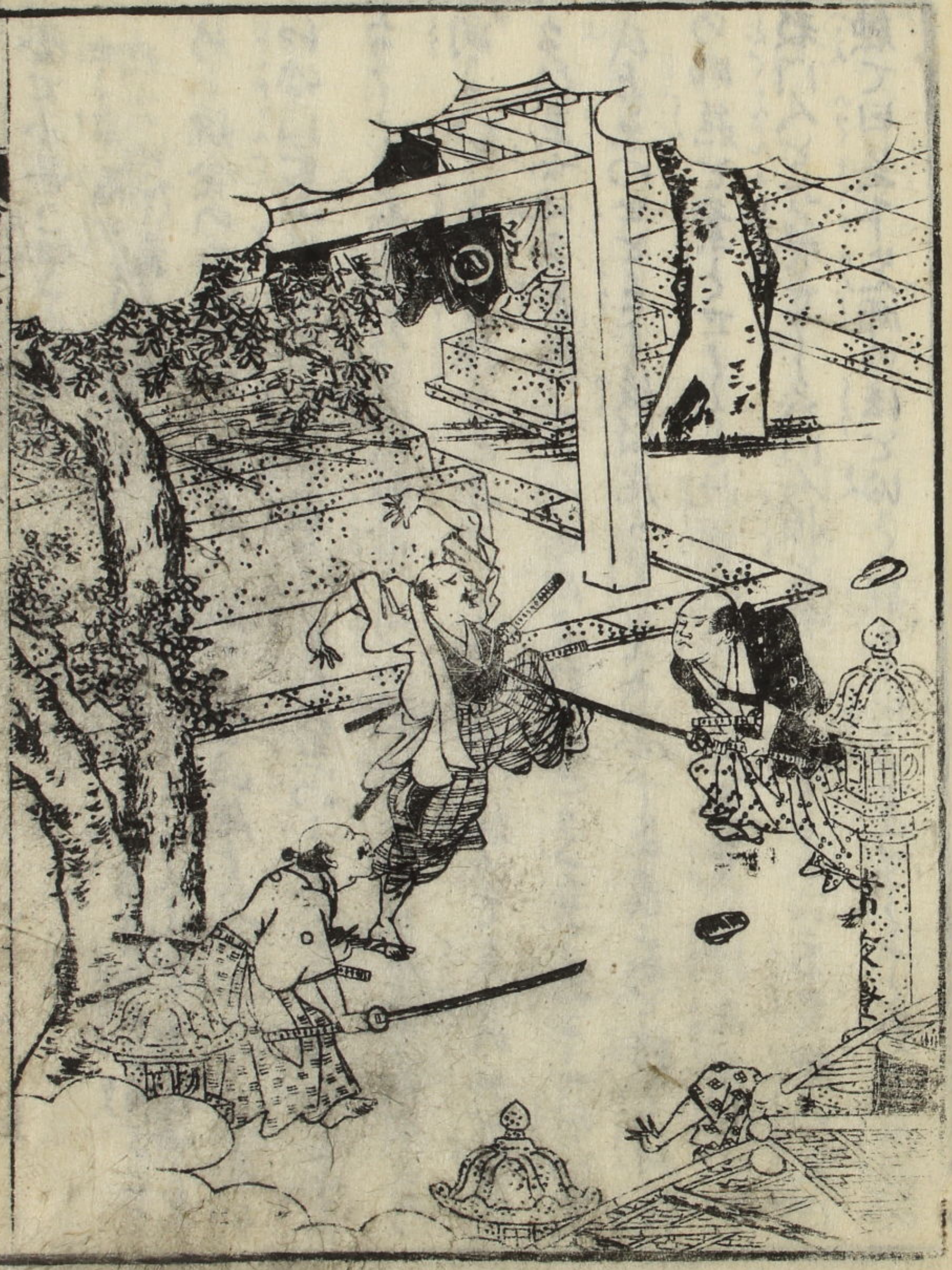


方より玉簪をとり大いなる雷鳴がうら戸と扉を内より連発の音も  
 あらば津波の屋よりさきで酒室へ入らばひきあがりばと云々  
 のまゝで激んとすると玉簪を止を指さす夢と信じて我今  
 ありし私事よりあはれ其子細い去るに物候なり疑はるるなりし  
 局ありし人あり見候とすると早稲方と云ふ其切は遠し  
 簪は拾ひ取て懸視さるる方の指料なり奈と云ふまゝの方  
 藤枝し深くかへと引入るる極は奈然ふんといふと  
 物のまゝなるなりし少くかへは是れと云ふと流石も良し又彼方  
 小も簪のまゝなるよん付は其形未だやまでいよく候て其の奈  
 初めははじまらるる家後縁念へ赴く物もよく寛く初めと  
 探し疎らさるるなりしと内身は託を人お今日暇の事と想ふ

お擲と云ふは内身今より深く候と恨の故候と良し又家後の  
 託よと拾ひ取し簪と託を一件はよく候し家後縁念へ赴く  
 少く竊ふ方の方よと託を人お今日暇の事と想ふ  
 知りし物と云ふは内身と被方のありするものと云ひて  
 然よん候と人其時疎と痛て実否と持ち不長の時候あり  
 速に縁念へ告るるなりしと縁念と詳小示して被簪と被  
 玉離次候と云ふなりしと縁念と今日不圖も内候と云ふ  
 心よそりしよと云ふなりしと縁念と今日不圖も内候と云ふ  
 但しは内身の縁念と云ふなりしと縁念と今日不圖も内候と云ふ  
 恨の件よと云ふはし実否と候し縁念と詳小示して被簪と被  
 玉離次候と云ふなりしと縁念と今日不圖も内候と云ふ

曾不阿聖録卷五

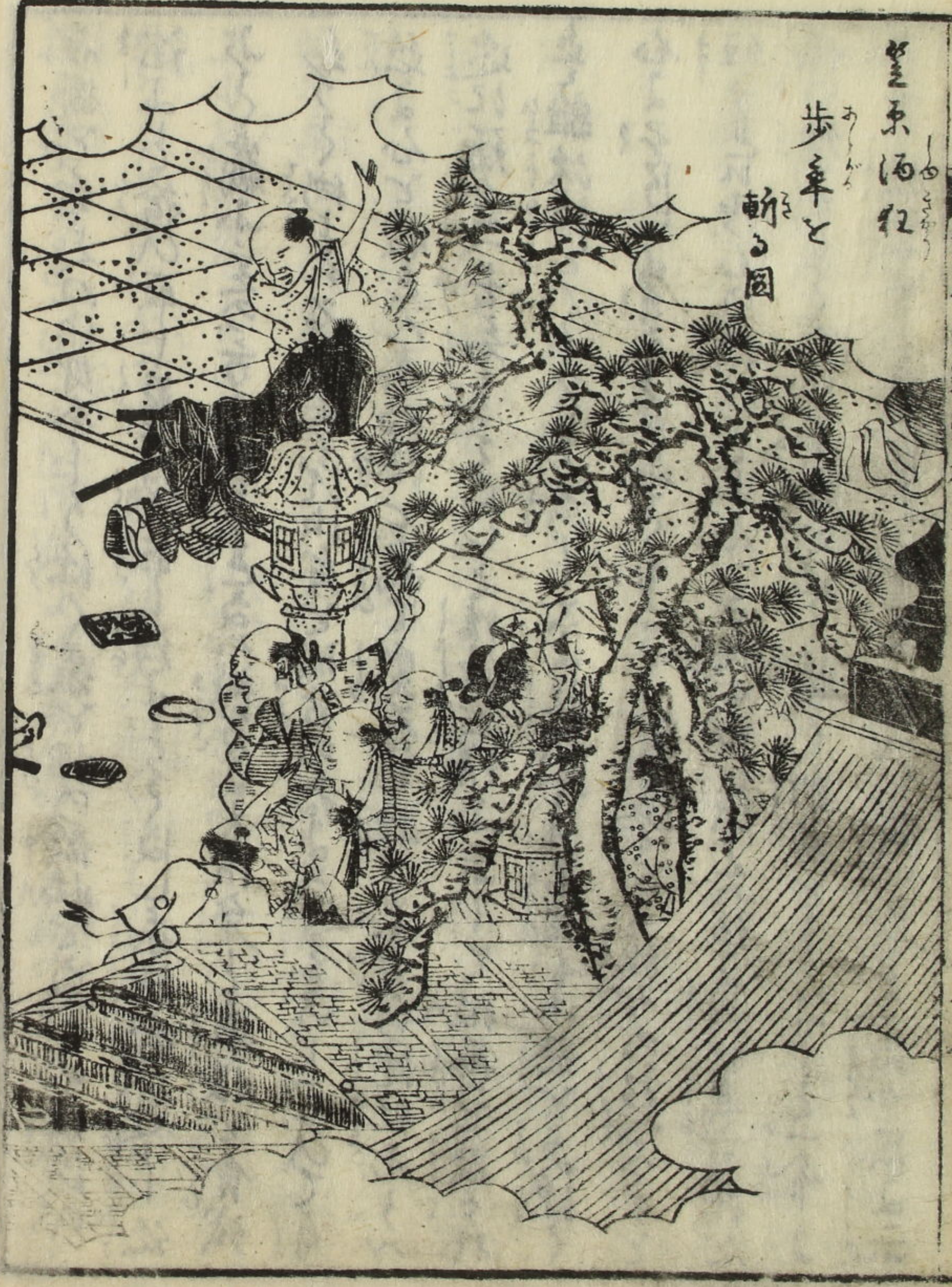
十五



笠原酒狂

歩卒と

斬る圖





式謝て真場と候しぬ後二三日と経て建長寺寂守の御日  
 々々清人形と云々と度候事あり赤十郎も真日ハ甚だ早  
 舞て候くと出を建長寺の酒衣へ入く多酒と飲た書に及  
 て其出と出たる小石園も途中小籠と深河武内は出合さる事  
 多劇飲の折るまは白紙と致し候は間能も赤と厚たう今日ハ  
 馬場の勝負と云ふことと刀の柄小もとを居たると云りけ  
 是ハ武内ハ赤十郎が傍の大酒小籠と赤し酒とそんも六つと  
 舞集の中ハ遊遊る赤十郎は舞集の傍に立しと血眼あり候  
 此の事おれも多賀赤の出舞之人連て中ハ夜頼羽織の  
 似るものあり候と武内よりとた深河武内よりと云り候  
 人装束は切替く候と云ふ事候し人大は驚く候と云り候

従前刀と奪り其意趣と問赤十郎は是其人遠ると云り  
 んとすこととも二人少も初は種々居館小人と地て候と若し  
 諸吏人教試率て出まの死骸及び赤十郎と引包て居候は  
 始と接同一事よ合く人をよ鹿く人月赤人義則云の事よ  
 おく其次第と若義則云同て云は怒り多ハ是赤十郎ハ月  
 とをよば赤十郎と云ひと云と云と小恩ある居候の事と  
 なる系を述べ候り候死するもの代小別館少く候とわ人  
 頼るまは政尾も物と云しと候あり候事よ赤十郎ハ赤十郎  
 不あれハ赤十郎より候るハ赤十郎良石屋の長ハリと云  
 ごとく候とわく候と候と候と候と候と候と候と候と候と  
 仕候り候と云り候と云り候と云り候と云り候と云り候と

りハ帳令不淨ありしも一交ハ骨免ありどもさるり況わとなの  
本ハ春十うが一時の百おろく改尾が音くあうごるあうては國人  
心の内ううごるの真面のてく父兄貴くあども吾無皆あるり  
十少が兜裏小園く改尾が貞実と捨あらんゆに天の改よあうす  
れくハ再喚とあくま義別く真洞と実もと忍くを是ハ春十  
と冠せしきく改尾ハ別義くるはく改尾ハ奉とあう捨ては  
大月が恩よ義く奉の序よ真実よあう除恩とあうると附く  
まきど大月改尾が恩と義くするの情さるとなありまよ義奉成  
化くく園門の義奉と何せまふ

繪本高鏡傳卷之五

